

大通公園を望む窓辺から

パリの墓地通い

常任理事 山科 賢児

「せっかくパリに来たのだから、もっと他に行くべきところがあるじゃない」とは言われるが、パリに立ち寄るとその度に、サクレ・クール寺院の近くにあるモンマルトル墓地を訪れる。だがなぜか道に迷い、いつも墓地の入り口になかなかたどり着けない。

ヌーヴェルヴァーグの旗手、映画監督のフランソワ・トリュフォーは1984年10月に脳腫瘍のため52歳で亡くなった。訪ねる先は彼の眠る墓である。高架橋の下に広がる木々が生い茂って薄暗い広い墓地の一角、黒い御影石の上にファンからの赤いバラやメッセージが置かれている墓は、意外なほど質素である。墓の前で佇んでいると、「アメリカの夜」と並んで、トリュフォーの代表作「大人は判ってくれない」に映し出される50年代のパリの街角のモノクロシーンが思い出される。

トリュフォーの新作が封切られると、今は閉館した狸小路の遊楽地下劇場や須貝ビルの地下の小さな映画館へ、前売り券を握りしめ初回の上映を観に行った学生時代も懐かしい。

墓地は公園のように整然と区画され、手入れも行き届いており、作家ではスタンダー、ゾラ、ゴンクール兄弟、音楽家ではベルリオーズ、オッフェンバック、画家ではドガなども眠っている。まるでフランス文化を楽しむ散歩道のような。

「何でも見てやろう」とガイドブック片手に朝から晩まで歩き回るのもいいが、「YOUは何しに日本へ?」と、日本のあれを観たい、これを体験したいと目的を持って来日する外国の人々が、最近多くなっている。先日、日本に来たフランス人家族のお気に入りが高野山と熊野古道であった。

パリのラーメンは美味しいが値段は高いし、地下鉄はきれいとは言えず、スリにあって危険も多く治安は良くない。しかし、それらに勝る人々を魅了する芸術・文化と、人に媚びない親切さや大人のエスプリが、パリにはある。

墓参りを済ますと、さて旅は終わりである。サンジェルマン・デュ・プレに生牡蠣を食べさせる瀟洒なオイスターバーを見つけた。パリ最後の食事は、帰国後の痛風発作の不安と恐怖に怯えながら、シャンパンとフランス各地からの絶品の牡蠣である。

ブラックホール

監事 篠島 弘

本年4月10日に日米欧の国際共同研究グループが銀河の中心にある巨大ブラックホールの撮影に初めて成功したというニュースが世界中を駆け巡った。

ハワイ（2カ所）、アリゾナ、スペイン、メキシコ、チリ（2カ所）、南極にある8つの電波望遠鏡を連動することにより、地球サイズの口径約1万kmの巨大望遠鏡を実現させたという。宇宙深部の観測などに用いられるハッブル宇宙望遠鏡の約2千倍の解像度とのことであるが、これは言い換えれば月面にあるゴルフボールを観察できるほどの倍率である。

具体的には、直接見えないブラックホールの代わりに、周囲に生じる電波、X線を観測した。ブラックホールの外側では重力で吸い込まれるガスなどがX線や電波を出すので、この電磁波を詳細に捉え、ブラックホールの輪郭を映し出すことにより黒い影を浮かび上がらせることに成功した。

宇宙には無数の星の集まりである銀河が少なくとも数千億あり、その中心には巨大なブラックホールが存在するとされる。分析によると撮影したブラックホールは球体で、その質量は太陽の約65億倍、その周辺には直径およそ1千億kmの光の輪が映し出された。

1916年にアルベルト・アインシュタインが一般相対性理論に基づき、ブラックホールの存在を予言していた。観測技術や膨大なデータを処理するコンピューターの性能が飛躍的に向上し、理論上の存在だったものが実際に画像として捉えられ、彼の正しさが証明された。

このブラックホールを可視化することに成功したのは、コンピューターの発達、大量のデータを送受する通信技術が無ければ不可能である。重要な特徴を見つけ出すデータ解析の手法ならびに人工知能（AI）や高速通信技術は将来の医療を大きく変えることが予想される。楽しみである。

